



2015年5月発行

すべてはみこころのままに

「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」

(ルカによる福音書 22章 44節)

主イエスと 11 人の弟子たちは、最後の晩餐のあとオリーブ山に向かい、ゲツセマネの園というところで共に祈りました。主イエスがここで血の出るような祈りをされたことはキリスト信者にとって忘れることの出来ないことです。ただそこには、絵画などを通して頭に刷り込まれたことがあるかもしれません。

実はゲツセマネの園でのイエス様のお祈りは、昔のキリスト教会にとって都合の悪いことでもあったのです。というのは、古代においてキリスト教に反対する人たちがこのところを取り上げてあざ笑ったからです。その人たちは、イエス様がたいへんに死を恐れていると言うのです。

主イエスは、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」と言って、神の怒りの杯である十字架がご自分に臨まないようにと祈られました。その様子からは、イエス様が死を恐れ、ほとんどおののいている状態であったことが見えてきます。このところを宗教改革者のルターは、「この人間ほど死を怖れた人はなかった」と説明しています。

そして、それと同時に思いますことは、私たちが知っている偉い人というものはたいいていの場合、死に臨んで恐れを示さないということです。死ぬまぎわになって恐怖で取り乱す人が尊敬されることはまずないでしょう。ことに宗教家にはそのことが強く要求されるのでありまして、宗教家が死を目の前にして「死にたくない」とわめいたとしたら話にもなりません。それでは主イエスはなぜ死を恐れ、苦しまれたのでしょうか。

そこで私たちは、主イエスのお心の中にあつた死がどういうものかを考える必要があります。

人はすべて死にます。けれども、それは当たり前のことではありません。人間にとって、「罪が支払う報酬は死」(ローマの信徒への手

紙 6 章 23 節) なのです。人がどんなに自然に、苦しまずに死んでいったとしても、それは神にとっては一人の罪びとの死です。いま主イエスはただ自分の命がなくなることを恐れているではありません。そうではなくて、神の前に罪を犯し、したがって罪の審きを免れることの出来ないすべての人間たちの死について恐れているのです。

神のみ子であられる主イエスはいま、すべての人の罪の身代わりとして死のうとされておられます。ご自身は罪のない方であつたにもかかわらず、罪びとに対する神の怒りを一身に背負われたのです。そうする以外、罪のために滅びゆく人間たちを救う手立てはありませんでした。イエス様は神の子であり、罪のない方でありますから、本来死を体験しなくて良い方です。それが罪びととして死ななくてはならないことになりました。自分ひとりの死だけでも耐えがたいことなのに、すべての罪びとの受ける呪いを一身に引き受けられたのですから、不安や動揺がない方が不思議なのです。そこで、もしも私たちが、いつか訪れる自分の死について何も恐れていないとするなら、それは罪の恐ろしさをわかっていないからなのではないでしょうか。神の前に自分が問われなければならない責任を知る人は死を恐れます。

主イエスの血の滴るような祈り、しかし聖書は、「キリストは、…祈りと願いをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」と書きます(ヘブライ人への手紙 5 章 7 節)。神の怒りの杯は取りのけられず、イエス様はやはり十字架上で死ななければならなかったのですが、にもかかわらず祈りは聞き入れられたというのです。それはイエス様が「この杯を取りのけてください」という自分の願いを、神のみこころに合わせて変えることが出来たからなのです。

ゲツセマネの園での主イエスの祈りの勝利は私たちに、祈りが本当に祈りである限り、超えられない困難はないことを教えています。

(2015年3月1日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊